

臣市・なか 金婚の祝

昭和二十七年三月十一日、私達は生家で結婚式を挙げた、私は二十七才、なかは二十才である。釜石の大洋漁業会社で、通信士として働いていたが、給料も多くなつたし、父のお気に入り、矢附、平間与三郎の三女、なかと前年婚約し、私の休暇が出来次第結婚式を挙げる約束だつた。

短い休みはあつた、三回ばかり田舎にかえり、仙台、白石等で交際を繰り返した。生家には兄雄一郎が復員する時、軍隊から連れてきた乗馬（桜正）がいて、それに乗つて会いに行った。

婚約の約十ヶ月後、一ヶ月の休みがとれたので、結婚式を挙げることになつた。あの時代の田舎では、両方の生家で結婚式が行われた。婿方の出席者は、婿も入れ全員、羽織、袴、和服正装、高下駄を履き徒歩で嫁方に行く。嫁方の出席者と婿方の出席者が顔を合わせ、田舎流の式が始まる、縁側の方には婿方が座り、向かい合つて嫁方の親戚、縁者が座る。婿と嫁は向かい合う位置に着く。

正面の床の間側には仲人、部落の要人などが座つたと思う。宴会が始まり頃合いを見て、婿の食い逃げと云つて、一足先に縁側から出て生家に歸つて、嫁の到着を待つ。

嫁と出席者は一緒に部落の端から、行列を組んで長持唄を歌いながら、部落の人々の祝福を受け、角かくした花嫁姿を見てもらい、婿方に到着する。庭では一段と声を張りあげ長持唄を披露する。

家に入り、まずは嫁ぎ先の両親に花嫁姿を見てもらい挨拶する。そして宴会の席につく。私達もこのやり方で、殆ど同じだつた。

あの当時は結婚写真を撮るの人は少ない、私の兄は二人共撮つていないし、妻の姉達も同じだ。

私達は結婚写真撮りたくて、朝一番のバスで紋付きと袴を風呂敷に包み、白石に行った。着付け屋で花嫁姿になつた妻と、私も正装して近くの写真屋撮つた。帰りは永野までバスは一緒だつた。

思い返せば結婚してから、五十年になつたのだ。長いようで短い五十年である、祖父の金婚式は昭和二年、私は二歳の時である、その写

真がある。

私の父母の金婚式、妻の父母の金婚式も盛大に過ぎました。どちらも子供が多いので賑やかだった。大勢の子供、孫に囲まれた写真を見、今は亡き両親を偲び、思い出しに一時を忘れるこの頃だ。

私達の金婚の祝いは、岩手県志戸平温泉で子供達が主催で祝ってくれた。温泉に入り、ご馳走を腹イッパイ食べ、写真を多く撮り、記念品を戴き、充実した二日間だった。

祖先が成し得なかつた、ダイヤモンド婚を達者で余生を過ごし、曾孫と共に迎えたい



金婚式記念額

平成十四年四月二十五日